17) ジェームス・E・ガレットソンの著作の編集史的・書誌学的研究

Compilatorical-Historical Studies on the Bibliography of the Works by James E. Garretson.

東京歯科大学 ○森山 徳長
長谷川正康

James Edmund Garretson (1828. 10. 18～1895. 10. 26) は，デラウェア州ウイルミントンに生れた．22歳の時，同町の Dr. Thacher に弟子入りして歯科を見習い，ニュージャーシー州ウッドベリで開業した．向学心の強い彼は，フィラデルフィアに出て来て，Philadelphia College of Dental Surgery (Pennsylvania College of Dental Surgery の前身) に入学し，1856年2月29日歯科の学位を得た．同年 Beulah と結婚した．

Philadelphia School of Anatomy で Demonstrator をつとめること5年，1862年 Philadelphia Dental College の創設と共に病理及治療学の教授に迎えられた．しかし，その時 Philadelphia School of Anatomy の Prof. Hayes Agnew の辞任で空席が出来たので，その地位に横すべりした．

2年後再び Philadelphia Dental College の，今度は解剖学及び外科学の教授となり，終生在職した．

南北戦争中は軍病院に勤務，1869年にはペンシルバニア大学医学部病院の Oral Surgeon に任命され，兼任した．かくして彼は口腔外科の領域で着々と地保を固めた．1880年 Dean に就任，15年間誠実にその務を果した．

彼は Originator of the Specialty of Oral Surgery と呼ばれ (Thorpe)，事実 S.P. Hullihen の後を承け口腔外科学の発展につとめた．その結果，全米ほとんどの歯科医学校の教科目に，口腔外科学がとり入れられ，抜歯のみに止っていた歯科外科の範囲を，大いに拡大した功績は大きい．

〔論文と著書〕

彼は1855年から著作活動を始め，フィラデルフィアに居住した関係で，Dental News Letter とその後身 Dental Cosmos へ最も多く，100以上の論文を寄稿している．その他にも，Dental Review, American Jour. of Dental Science, British Jour. of Dental Science, Independent Practitioner 他にも論文を掲載した．

彼は教養豊かな人物で，John Darby のペンネームで，口腔外科学以外にも数冊の哲学的エッセイ集を著している．列挙すれば，

Thinkers and Thinking (1873)
Hours with John Darby (1877)
Brushland. by John Darby. (1882)
Garretson's Works (1887)
Man and His World (1889)

その他に，Dental Cosmos の追悼文によれば，Odd Hours of a Physician, Nineteenth Century Sence などの出版があったとある．

〔口腔外科教科書〕

しかし何といっても，彼のライフ・ワークと言えるものは，彼が開拓した新しい分野の教科書である．

南北戦争の軍病院から教職に戻り，ペン大学医学部病院の Oral Surgeon に任命された1869年に，彼の処女出版

A Treatitise on the Diseases of the Month, Jaws and Associated Parts.

が Philadelphia の J.B. Lippincott & Co. から出された．3年後 (1872) には

A System of Oral Surgery, being a Consideration of the Diseases and Surgery of the Mouth, Jaws and Assoicated Parts.

と改名した再版が出た．

次に同名 A System of Oral Surgery, ……の3版が1881年，4版が1884年，5版が1890年，6版が1895年に出た．

彼の死後1898年に，改訂第6版が下記題名で出た．

A System of Oral Surgery and Dentistry. 6 th Edition, Revised. (以上，Index of the Periodical Dental Literature による)

東京歯科大学図書館は，昨年初版を購入，また第3版および第5版を所蔵している．(5版は伊沢家寄贈)

初版は42章700頁であるが，3版は61章900頁に拡大され5版は78章1400頁の部厚な大著となった．その書誌学的詳細につき報告した．本書は著者の初期の経歴から，顎・顔面・口腔の外科局所解剖の記述内容がすぐれており，歯科医学全般の教科書の形も整っている．

河田・大月訳『歯科全書』上・下巻及び図譜は，(明18～23) 本邦初期の歯科界に大きな影響を与えた．その書誌学的詳細は追って報告する．

18) 高山紀斎著「歯科薬物摘要」について

On the Kisai Takayama's "Concise Dental Pharmacology"

森山　徳長
○西尾　宏英
石川　達也

明治11年帰朝して銀座に診療所を開いた高山紀斎は，洋法歯科医学の新知識を以て診療に当った．

当時歯科医学の成書らしきものがなかったので，歯科医学を志す者のため教科書『保歯新論』(明治14年) を世に問うた．またその通俗啓蒙小冊子『歯の養生』(明治15年) を著した．その後引続いて，診療に最も必要な薬物の知識をまとめて刊行したのが，この『歯科薬物摘要』である．

明治18年11月11日版権許可，19年2月15日出版の本書は，表題のように，歯科薬物学のハンドブックとして，座右に置いて利用できるような配慮で編集されている．著者兼出版人東京府士族高山紀斎，発売書肆日本橋馬喰町島村利助，本郷春木町同支店（定価50銭）と奥付に記されている．

巻頭の叙（緒言にあたる）には，本書の目的が以下のように書かれている．日付は明治18年12月上浣（上旬）

『歯科における器械は鉄砲や大砲のようなもので，薬品は火薬である．いくら精巧な鉄砲でも，弾丸・火薬の良いものを撰ばなければ良い成果は生れない．であるから歯科医であるものは，薬品をよく撰び，その薬効を研究しなければならない．

世人は歯科は外科の一派で，学説も狭い局部に限られているように思っているが，そこに入って見れば道は奥深く，造詣を深めるには一生勉強を必要とする．歯科が，専門科目として成立している理由はそこにある．

ところで歯科医学の学問は，これから発展しようとする時運なのに，薬物学を取扱う成書が出版されていない．それで歯科用薬80物種余りを取上げ，これを麻酔，興奮，緩和，収斂，変質，腐蝕などの数項目に分って，薬理作用や用法を示して．初学者の便を計ることとした．この小冊子では，学問の奥底まで詳らかにするというわけには行かないが，とりあえず『歯科薬物摘要』と名づけて世に問うことにした．古えの人は『良工は器を撰ぶ』といったが，入門しようとする者は，その故事にならって大いに本書を活用してもらいたい．』

目録（目次）は緒言にあるように数項に分れているが，たとえば

(1) 酔麻薬の項では，7種

阿芙蓉（阿片）	1丁(頁)
莫爾比涅（モルヒネ）	3丁
双蘭菊根（アコニチン）	4丁
格魯魯保児母（クロロホルム）	5丁
結晶抱水格魯刺児（抱水クロラール）	7丁
沃度保児母（ヨードホルム）	8丁
亜硝酸亜密児（亜硝酸アミール）	8丁

(2) 興奮薬（11種）

磁砂精（アンモニア水）	9丁
亜爾個保児（アルコール）	10丁
依的児（エーテル）　等等	11丁
(3) 緩和薬　2種	19丁～20丁
(4) 収斂薬　22種	20丁～40丁
(5) 変質薬　4種	40丁～44丁
(6) 腐蝕薬　3種	45丁～46丁
亜砒酸	45丁
格魯謨酸（クロム酵）	46丁
格魯児化亜鉛（塩化亜鉛）	46丁

(7) 黙加尼加薬 Mecanica（賦形薬）　47丁～65丁

この項にはグリセリン，蜂蜜，金，銀，錫，石膏，アマルガム，ゴム，ラバーダム，ヒル氏ス